むにゃむにゃ（７）

阿門　遊

七　将来の夢は？

「さあ、みなさんの将来の夢は？」

　教壇に立った先生が生徒たちを見回す。

「どう、洋介君」先生が頭をこっくりとさせている洋介を指名した。

「えっ、僕ですか」洋介は、突然、名前を呼ばれ、慌てて立ち上がる。頭をかきながら

「将来の夢ですか？ええと、サラリーマンじゃなくて、小学校の教師です。先生みたいな教師になりたいんです」

「そう。ありがとう。でも、教師は、あなたたちが思っている以上に大変な仕事よ。授業中に居眠りをしている暇はないわよ。がんばってね。じゃあ、優子さんは」

「アイドルじゃなくて、シンガーソングライターです」力強く答える優子。

「いいわね。その時には、この学校の校歌も作って、入学式や卒業式で歌ってね。最後に、健太君は」

「ロケットを作る博士じゃなくて、宇宙ロケットのパイロットです」

　健太は洋介と優子ちゃんを見る。二人とも大きく頷いた。

「そうね。これからは宇宙の時代よね。みなさん、いろんな夢があっていいわね。誰も人の夢を邪魔できないし、一人占めにはできないわ。それじゃあ、今日の宿題は「将来の夢」の作文よ。明日までに書いてきなさい」

「えええー」クラス中の生徒が声を上げる。

「先生の夢は何ですか？」健太がすかさず尋ねた。

「そうね。先生の夢は、君たちが自分の夢をかなえることよ」

　先生はにっこりと微笑んだ。

「さあ。そのためにも、みんなは勉強をしなくてはいけないのよ。はい、これは追加の宿題よ。作文と同じように、明日までにやってきなさい」

　先生は生徒たちにプリントを次々と配り始めた。

「うわあ。こんなにたくさん。こんな教師にはなりたくないなあ」

　洋介が天井を見上げて叫んだ。だけど、先生は「これも、夢をかなえるために必要なことよ」と平気な顔だ。優子ちゃんは「これじゃあ、夢を見ている暇がないわ」とランドセルに宿題をしまう。健太も頷く。

「できれば、先生もみなさんの夢を食べてしまいたいけれど・・・」

　先生が黒板に振り向きながら呟くのが健太の耳に聞こえた。健太には、一瞬、先生の横顔がむにゃむにゃの顔に見えた。